ネーションの舞台

―― ケベックとフランダースの舞台芸術と表象の政治学 ――

藤井 慎太郎

ケベックとフランダースは奇妙な符号を見せている地域である。[1] 大西洋を隔てて地理的にも歴史的にも異なる文脈に位置しながら、カナダとベルギーという連邦国家の内部にあって、深刻な国内言語対立問題を経て、今日では半ば独立国家のような様相さえ呈している。かつてケベックの人々は「歴史も文学も持たぬ民族」[2] だとさえいわれたし、ゲント出身の作家メーテルランクは決してオランダ語によって書こうとはしなかった。だがこの数十年来、両地域は数多くの芸術家を生み出し、とりわけ舞台芸術の開花する豊穣を知ることになった。今日、ケベックでは演出家・劇作家のロベール・ルパージュ、ドゥニ・マルロー、ワジディ・ムワワド、ダニエル・ダニス、劇作家のミシェル・トランブレ、ノルマン・ショレット、振付家のエドゥワール・ロック、マリ・シュウィナール、ジネット・ローラン、現代サーカスのシルク・デュ・ソレイユ、フランダースでは演出家のヒー・カシールス、アルヌ・シーレンス、劇団の tg スタン、振付家アンヌ・テレサ・ドゥ・ケースマイケル、アラン・プラテル、ヤン・ファーブル、ヤン・ロワース、ヴィム・ヴァンデケビュス、シディ・ラルビ・シェルカウィを筆頭に相当数の舞台芸術家が国際的に名を知られている。

とりわけモントリオールやブリュッセルは1980年代以降、舞台芸術にとって世界的な結節点となったといっても過言ではない。しかも、わずか半世紀を遡ると両地域には舞台芸術の独自の伝統はなかったも同然なのだ。もちろん、娯楽を供する場としての劇場は以前から存在したし、その歴史はつねにより以前へと遡っていくことができる。だが、たとえばフランスや英国にフランス演劇、英国演劇と呼びうる演劇が存在すると考えられるように、国民が共有する歴史的財産として制度化され、独自の国民性を体現していると考えられる国民演劇としては、ケベックやフランダースに演劇は存在したことがなかったのだ。すると、この変化はいかなる条件の下で可能になったものなのか。

この論考では、両地域における舞台芸術の急激な発展は、「国民」としてのケベック人とフランダース人の自己認識の誕生と同根の出来事であることを、「représentation（表象、上演、代表）」[3] という、演劇的であり政治的でもある概念を鍵として主張してみたい。今日ではケベックとフランダースの舞台芸術は、創造・普及・教育といった演劇を取り巻き支える制度の面からも、

それに関わる人々の意識においても、英語圏カナダおよびフランス語圏ベルギーの舞台芸術とは区別される領域を構成するに至っているが、それは両社会がナショナリティの問題に直面し、旧来の支配的な枠組みを離れて、カナダやベルギーの一部であるよりも前に、自らをケベック、フランダースとして再定義し、国民として表象＝上演するようになった過程において生み出されたものなのだ。

ケベックとフランダース、矛盾と逆説の場

ケベックやフランダースの舞台芸術の誕生と相関関係にある上演＝表象の体制の根本的変化の意味、両地域における舞台芸術、政治、ナショナリティの関係を考察する前に、まずはこれらの社会の特徴を振り返っておこう。

ケベックもフランダースも国のようであり国家ではない。そこに住む人々はしばしば、カナダ人、ベルギー人である以上にケベック人、フランダース人であると考え、[4] 英語系カナダ人、フランス語系ベルギー人の多くがそれぞれカナダ人、ベルギー人であるという意識を持ち続けているのとは対照をなす（英語圏カナダEnglish Canada、フランス語圏ベルギーBelgique francophoneを一言で表す言葉がいまだにないのは示唆的だ）。[5] いずれも域内人口、域内市場が小さく（人口約715万人の埼玉県程度）、そのことが芸術の実践にも少なからず影響している。その文化は、ケベックの場合は北米的でもあり欧州的でもあり、フランダースの場合はゲルマン的でもありラテン的でもある上に、近年の移民流入の増加を受けて、特にモントリオールとブリュッセルを中心に構成員の多様化と文化の混淆化が著しい。

ケベックはカナダ連邦を構成する10州中、面積が最大で（日本の４倍以上）、また唯一フランス語一言語主義をとる州である。[6] その人口（780万人、2009年）はカナダの人口（3,359万人）の４分の１弱にあたる。[7] ケベックの経済的・文化的な中心都市モントリオールは英語話者の住民も多く居住する歴史的な二言語都市、[8] 移民出身の住民が集中する国際都市であり、州都ケベック市は北米には数少ない中世欧州を想起させる城塞都市だ。フランスによる植民は400年ほど前に始まったが、英仏戦争においてフランスが敗れた結果、1763年のユトレヒト条約以降は英国の統治下に置かれ、1867年に発足したカナダ連邦（当時自治領）の一部となり、1960年代以降はフランス語を軸とした自治を強めてきた。

フランダースはベルギー連邦王国の北半分、オランダ語圏に位置し、オランダ語話者（約625万人）は連邦の人口（1,052万人、2008年）の６割ほどを占める。[9] 中世には多くの小国に分かれていたベルギーは、オーストリアついでスペインのハプスブルク家領、フランス、オランダの一部となった過去を経て、1830年にオランダから独立して成立した（ドイツによる侵攻も二度経験している）。ブリュッセルもまた移民出身者が多数に上るコスモポリタン都市、舞台芸術にとっても蘭仏両言語圏の劇場が集中する重要な都市だ。ブリュッセル首都地方は地理的にはフランダー

ス地方の中に位置し、法律上は蘭仏二言語主義地域だが、現実にはオランダ語が通じないことも多い（モントリオールが、法律上はフランス語一言語主義に則りつつも、事実上は英語のみを用いて生活できるのと対照的だ）。ベルギーの建国以来、フランス語を通じた一体的な国家運営がなされてきたが、言語圏を基礎とした自治が強化され、1970年に始まる5回の国家制度改革によって、ついに1993年にベルギーは連邦国家となった。[10]

いずれの地域でも、言語はアイデンティティの重要な核と見なされている。カナダのフランス語、ベルギーのオランダ語は長い間、社会言語学でいうダイグロシアにおける下位変種の位置に置かれ、両地域では支配的言語集団（上位変種である英語、フランス語）による長い抑圧に対抗して自治を実現させてきたという意識が強く、少数派意識と多数派意識が複雑に共存している。[11] ケベックは、英語圏カナダや米国の政治的、経済的、文化的な影響を強く受けながら、フランス語を中心とした独自の社会を守ってきた。だが、宗主国フランスから政治的に切り離されて以来の2世紀半ほどの間に、フランスとケベックとの間には無視できない言語的差異も生じた（書き言葉においてはさほどではないが、話し言葉については発音・語彙・統辞法に関して相当な隔たりが生じている）。フランダースの場合は、オランダ統治に反発して独立したベルギー建国の経過もあって、半世紀ほどの間、オランダ語が用いられうる領域は制限され、北部まで含めてブルジョワジーの共通語だったフランス語を通じた国家運営がなされた。フランダース地方のオランダ語諸方言は、発音や書記法の標準・統一化が長くなされず、オランダのオランダ語との差異はもちろん、方言間の差異も大きい。

今日のケベックやフランダースは、厳格な、ときに過剰にも思われる一言語主義政策によって閉ざされているようで、開かれた社会を構成してもいる。ケベック人やフランダース人は排他的で偏狭なナショナリストのように表象されることもあるし、ケベックにおける先住民との問題は解決済みとはいえず、フランダースにおける極右政党の伸長、さらに政治全体の右傾化は不安を抱かせるにせよ、女性、移民、同性愛者、経済的弱者といった少数派な人々に対して開かれた社会、多様性がごく当たり前の日常をなす社会を実現させている[12]（カナダとベルギーがともに同性婚を制度化していることは示唆的だ）。

ケベック社会とフランダース社会の根本的変容　1960－70年代

現代的な意味でのケベック社会とフランダース社会の成立を象徴するのは、1960年代以降に生じた変化だ。ケベックにおいては、1960年に始まってその後の20年間で社会と意識のあり方を根本から変化させた「静かな革命」であり、フランダースにおいては言語境界線の固定（1962－3）から1970年に始まるベルギーの国家体制の連邦化に至る時期だ。この時期を通じて、両地域におけるアイデンティティ意識と自己表象＝上演のあり方は大きく変容し、「ケベック人」や「フランダース人」を誕生させ、さらに「ケベック文化」や「フランダース文化」をも同様に誕生させ

たのだといえる。

1960年に自由党のジャン・ルサージュ政権が成立するとともに、「後進的」だったケベック社会の急速な近代化が始まった（後に「静かな革命」と呼ばれる）。それは、まず第一に社会の世俗化を意味した。それまでのケベックではカトリック教会の力が強いまま維持され、政府ではなくカトリック教会が教育・医療・福祉の領域を主に担い（教育は連邦ではなく州政府の権限に属する領域だが、ケベック州には教育省が存在しなかった）、精神的な影響力を行使し、一言で言えばアンシャン・レジームが温存されていたのだ。ケベック州政府はカトリック教会が握っていた領域を奪回し、さらに英語系資本が支配し、英語系労働者を優遇していた大企業を州有化し（国有化nationalisationとも呼べよう）、それによってフランス語話者にとっての経済的・社会的成功の回路を開いた。「フランス語化」[13]はケベックの近代化のもう一つの顔であり、フランス語のみを用いながら学び、働き、生活し、成功することが可能である社会の建設が、静かな革命のスローガンの通りにケベック人が「我が家の主人」となることが目指された。1967年には、カナダ連邦成立百周年を記念したモントリオール万博を訪ねたフランスのドゥ・ゴール大統領（当時）が、市庁舎前の広場を埋め尽くした人々を前に「自由ケベック万歳」を叫び、独立を希求するケベック人の思いはさらに強まった。また、1968年に州立法議会がフランスと同じ「国民議会」を名乗り始めた頃から、カナダではなくケベックを基礎とする「国民」の語彙が急増した。[14]同年に結成された独立主義政党ケベック党は1976年には州政権の座についた。1980年と1995年には独立に向けた意思を問う州民投票が行われ、二度とも独立は否定されたものの、2回目は独立賛成49.4%に対して反対50.6%の僅差だった。

フランダースでも同様の動きが確認されるが、両地域において大きな影響力を持っていたカトリック教会の役割については注意が必要である。ケベックのナショナリズムはカトリック教会に対する反発を通じて展開したが、フランダースのカトリック教会は社会主義政党に敵対したキリスト教民主主義政党の存在を通じて、ナショナリズム（「フランダース運動Vlaamse beweging」）と結びついてきた。[15]フランダースのオランダ語一言語主義は1930年代には実現していたが、フランス語を話すブルジョワジーやフランス語が象徴する文化的優位性の伝統は根強く、その影響力の排除は容易ではなかった。オランダ語圏とフランス語圏を隔てる言語境界線は10年ごとの人口調査の都度、見直されていたが、そのたびに境界線周辺でオランダ語からフランス語への言語転移（「油染み」）が見られ、フランダースに不利益になるかたちで境界線の見直しが必要になっていた。それを背景に1962—3年に制定された2本の法律によって、言語境界線は不可侵の国境のように固定され、フランダースのオランダ語化はさらに徹底された。1968年2月には、フランダースにあって歴史的にラテン語ついでフランス語で運営され、戦後も二言語大学としてフランス語部局を残していたルーヴァン大学に対して「ワロニー人、出ていけ」と叫ぶフランダース人が連日抗議運動を続け、解決策を見出せなかったファンデン・ブイナンツ内閣が総辞職に追い込まれ

た。その末にルーヴァン大学は二言語大学としては維持できず、フランス語部局は数十キロメートル離れたフランス語圏に新ルーヴァン大学として分離移転せざるを得なくなった。[16] ルーヴァン大学に続いて数年のうちに政党も全て言語別に分離された。その一方、フランダースは産業の育成と近代化に成功し、今日では南部をしのぐ経済的繁栄を享受し、[17] 連邦政府の高級官僚やベルギー全体に展開する企業の重役のように二言語運用能力を求められる役職は今ではフランダース人が多数を占め、フランス語話者が権力の中心を占めていた過去とは状況は一変した（1970年代以降の連邦首相はほぼ例外なくフランダース人である）。2007年6月の連邦議会選挙の後には、フランダースの政党とフランス語圏の政党の間で連立政権合意が得られず、半年以上組閣ができないという危機を招き、国家ベルギーの機能不全を前にフランダースの独立を支持・容認する声はより多数になりつつある。

今日のケベックは、二公用語・多文化主義を掲げる連邦とは異なる、フランス語一言語主義に基づいた独自の言語・教育・文化・福祉政策を有し、本来は連邦政府の権限に属する外交・移民・多文化主義・先住民政策においても独自政策を採用し、実施している（ケベック州政府は国際関係省と国外州政府事務所を持ち、国際法の領域でも一定の権限を行使している）。フランダースはオランダ語一言語主義に基づいて、蘭仏独三公用語主義を採用する連邦政府から、連邦国家化の過程で言語・文化・教育・経済などの領域の権限、さらにはその枠内での外交権限も獲得した（ベルギー連邦政府は権限の大半を、国家制度改革を通じて地方・共同体政府に、他方では欧州統合の文脈において欧州連合に委譲し、抜け殻になったとさえいわれる）。その過程で、ケベックはフランス、フランダースはオランダと、言語文化の共有を媒介項として（一体化を目指すことなく）協調姿勢を強めた。[18]

こうした社会の近代化は「国民国家化」と言い換えることもできるものであり、人々は「国民」としての自覚を高め、自らを「国民」として表象するようになった。そして、自治の強化ひいては分離独立を支持するメディアを通じて、[19] その自己イメージは急速に、広く、深く人々の心中に浸透した。カナダ連邦政府が英仏二公用語政策の推進を通じて、またカナダ遺産省とカナダ芸術評議会の政策を通じて、カナダ全体に及ぶ全国的な政策権限を有しているのとは対照的に、ベルギーにおいては連邦政府の権限はいっそう限られ、フランダースの姿はさらに「国家」に近いものだといえる。

ケベックとフランダースの舞台芸術の「誕生」

1968年に上演されたミシェル・トランブレ作『義姉妹』は、ケベック人の自らの表象の変化が、自らの上演の変化でもあったことを確認させてくれる。これは、モントリオールの労働者階級特有の方言「ジュワル (joual)」（「馬cheval」の発音に由来する）を用いて書かれた戯曲だったが、これまでの劇作家がまず決して用いることのなかった言語を用いて、これまで取り上げられるこ

とがなかった、恵まれない境遇の女性に光を当てるものだった。それは、戯曲あるいは上演の時空間という枠の中に、何を物語として再現＝表象するのかという美学的意味において、さらに、ケベックの人々が自らをいかに表象＝上演し、代表させるのかという政治的意味においても、表象＝上演＝代表に関わる問題でもあった。『義姉妹』上演によって「ケベック演劇」の誕生は決定的に印象づけられたのだった。

ケベック演劇の誕生は、フランス語話者が静かな革命を経てフランス系カナダ人 (Canadien français) であることをやめ、ケベック人 (Québécois) として自らを再定義し、表象するようになる変化と軌を一にしている。[26] これは、カナダのみならずフランスにも自らのアイデンティティの根拠を求めなくなったことの表れであり、同時に、英語圏カナダやフランスに対して人々が抱き続けてきた劣等感からの脱却の始まりだったといえる。[27] 英語圏カナダに対抗する必要から、ケベックのフランス性がよく強調されたが、それはフランスに対する（今日でも根強い）劣等感と引き替えになしえたことだからだ。この作品の上演は、ケベック演劇がフランスから自立し、「ナショナル・レパートリー」を備えたケベック演劇として成立する大きな契機だった。言語の日常的直接性はケベック演劇の大きな特徴だが、これは単なるリアリズムを超えて高度に政治的な意味も持っていた。フランスの文法の規則に従う書き言葉ではなく、現実に根ざした話し言葉が重視されるのは、ケベック固有のレパートリーを追求する運動においてはある意味では当然のことだからだ。さらに、社会の中でより公正な表象＝代表を求めていたのはケベック人（とそのフランス語）だけではなかった。資本主義経済における弱者、女性、同性愛者、芸術家といった社会の周縁に位置する人々の表象と参加は、現在に至るまでケベック演劇に根づいている。さらに、自らの分身ともいえるこうした存在を主人公とすることで必然的に自己言及性が生じ、それは芸術家の形象を通じて劇中劇という形式をしばしばとることも指摘できる。

フランダースでも、演劇の反文学性（ないし非文学性）は大きな特徴の一つだ。すでに書かれた戯曲を再現として忠実に上演するよりも、ドラマトゥルクの助けを得て、戯曲さらには戯曲以外のテクスト（小説、映画、メディア記事…）をもとに、上演テクストをその都度つくり出す手法がよくとられる。その背景には、ベルギーの枠組みを離れたときに最初に参照される枠組みであるオランダにおいても、オランダ語による演劇ないし劇文学の伝統が、たとえばフランスと比較してそもそも豊かではなかったこともあろう。古典的なレパートリー作品を上演するときでも、口語性と同時代性は大きな特徴だといえる。フランダースの舞台芸術はより身体的、舞踊的、視覚的、パフォーマンス的な表現に向かい、より大きく開花した（ケベックの演劇人が総じて分離独立を支持し、ときに独立運動の先頭に立っていたのとは違って、フランダースの舞台芸術家は一般的にフランダース運動から距離を置き、作品においてフランダース性が自己言及的に主題となることも稀である）。フランダースの舞台芸術の誕生を印象づけたのは1982年、アンヌ・テレサ・ドゥ・ケースマイケル振付『ファーズ』のブリュッセルでの上演だった。スティーヴ・ラ

イヒの反復的な音楽に、二人の女性ダンサーによる反復的な動きを重ね合わせたこの作品は、その後に続くフランダースの舞台芸術家の旺盛な創造性（「フレミッシュ・ウェイヴ」）を予告し、また現代ダンスの中心が再びアメリカ合衆国から欧州に移りつつあることを示した。それがまだ生まれたばかりのカイテアターの支援を受けていたことも、その後のアーツ・センターが果たす重要な役割を示唆していた。

こうした時代は、一つのタブーを破ることによって全てのタブーを破ること、全てを新しくつくり出すことが可能であると思われた幸福な時代だったといえる。演じる側も、観客も、演劇の伝統も確かに若かったが、若さと新しさこそが必要だったのだ。新しい演劇創造の方法（プロとしての教育を前提としない集団創造）、新しい観客との関係（芸術文化の民主化）、来るべき社会（新たな政治共同体）との関係を求めた彼らにとって、全ての問題は同根であり、一挙に解決しうる問題だと考えられたのだといえよう。そこでは、たとえばフランスの芸術家が感じるであろう伝統の重圧を受けることもなく、ケベックやフランダースの芸術家は、既存の社会あるいは美学的秩序に異議を申し立て、旺盛な好奇心をもって来たるべき演劇と社会を夢想し、実験を続けた。演劇と政治の間には想像力によって媒介された強い結びつきが存在していたのである。

舞台と制度

ケベック人、フランダース人が自らを表象＝上演する、そのあり方が大きく変化すると同時に、その舞台を支える制度も根本から変化する。その変化はまず上演の場の整備に始まる。ケベックでは19世紀後半以来、パリやニューヨークに影響を受けた商業演劇が盛んであり、かのサラ・ベルナールも6回にわたってケベックを訪れ公演したし、英語での上演を行う劇場も多かった。モントリオールには戦後、リドー・ヴェール劇場（1948年開館）、ヌーヴォー・モンド劇場（1951年開館）など、現在も中核を担うフランス語系民間劇場の開館が相次ぎ、従来の劇場地図を塗り替えていた。1963年には市長の発案をもとに、モントリオール市中心部に劇場を中心とする芸術複合施設プラス・デ・ザール、1971年には州文化省の主導でケベック市に大型劇場施設ル・トリダンが開館した。特に前者は1950年代の計画段階では、アメリカ人プロデューサーを招いてブロードウェイ作品を主に上演することが考えられていたのだった。[22] 1969年にモントリオールに開館したオージュルデュイ劇場は、ケベック演劇のレパートリーの形成を使命とした、まさにケベック人がケベック人を演じるための劇場であり、ナショナル・レパートリーの構築をめぐる議論に多大な影響を与えた。わずか10年ほどの間に根本的かつ決定的な変化が生じたのだ。

フランダースでは、ブリュッセルに王立フランダース劇場（KVS、前身となる劇団の結成は1852年、劇場を持つのは1877年）、王立オランダ語劇場（KNS、前身の国立劇場の創設は1853年、現名称はヘット・トネールハウス）がすでに19世紀以来存在し、さらに、1899年以来長いことKNSの第二劇場となっていた市立劇場を改組して1965年に創設されたゲントのオランダ語劇場

（現在のNTGent）がそこに加わった。これらのオランダ語劇場ではしかし、パリの演目を模倣するかのような冒険のないレパートリーが支配的だった。同時に、王立フランス語劇場（アントワープ、1834年開館）やグラン・テアトル（ゲント、1840年開館）などフランス語系劇場も、フランス語話者であるブルジョワジーを中心とする観客に対して劣らず重要な役割を果たしていた（今日では、当時の外観を残しつつ、ヘット・トネールハウスとフランダース・オペラというフランダースを代表する組織の拠点に変容しているのは示唆的だ）。状況が変化するのは、制度の一部をなす劇場に飽き足らない若者たちが、1970年代以降、各地に実験的なアーツ・センターを創設してからだ。カイテアター（ブリュッセル、1977年にフェスティヴァルとして創設、1993年に現在の場所に開館）、ドゥ・シングル（アントワープ、1980年開館）、フォーラウト（ゲント、1982年開館）、ストゥック（ルーヴァン、1970年代後半のルーヴァン大学の学生の運動が母体）、ドゥ・ヴェルフ（ブリュージュ、1986年開館）などが、政府の支援が旧来の制度的劇場に限られる中、公的支援も受けないまま自発的に生まれていった。[25] 演劇とダンスといったジャンルの区別も、ハイ・カルチャーとポップ・カルチャーの区別もなく、初めから多領域にまたがって、これらのアーツ・センターは1980年代の舞台芸術の急激な発展の舞台となり、変化を下支えし、今日では大規模な公的支援を受け、多様性と柔軟性を残したまま制度の一部を構成するに至っている。

舞台芸術に関わる人材の養成機関や職能団体も整備が進んだ。ケベックでは、俳優養成のためのコンセルヴァトワールがモントリオール（1955年）、ケベック市（1958年）、カナダ国立演劇学校がモントリオール（1960年）に創設された。CEGEPと呼ばれる大学の教養課程レベルの学校や、1969年に創設されたケベック州立大学モントリオール校にも同年、アメリカ的な実践家養成コースを持つ演劇科がつくられた。欧州諸国にも先がけて1981年にモントリオールにつくられたサーカス学校は、公的支援を受けて整備されたサーカス都市のなかに2003年より迎えられている。舞台芸術領域の職業化・専門化の進行を反映して、演劇人の職業団体の設立も進み、1958年にはカナダ・アマチュア演劇協会（ここから1972年にケベック若者演劇協会が「分離独立」する）、1965年に劇作家の互助組織として劇作家センター (CEAD)、1976年にケベック演劇学会が設立され（演劇専門誌『ジュ』創刊も同年）、さらに、政界に対して演劇界の利害を代弁するケベック演劇評議会（CQT、1983年創設）、ケベック演劇批評家協会（AQCT、1984年結成）が続いた。

フランダースで重要な教育機関はブリュッセル、アントワープ、ゲントにあって長い歴史を持つコンセルヴァトワール、1946年に創設されたステュディオ・ヘルマン・テルリンク（アントワープ）、1962年に創設された映像と舞台芸術の学校RITS（ブリュッセル）、振付家アンヌ・テレサ・ドゥ・ケースマイケルが中心となって1995年に創設された現代ダンスの学校PARTS（ブリュッセル）などだ。ブリュッセル、アントワープ、ゲントの大学にもより理論的な演劇学科が設置されている。さらにフランダースの舞台芸術の情報拠点として、フランダース演劇研究所 (VTI) が1987年にブリュッセルに創設され、舞台芸術と文化政策に関する情報を主にプロ向けに提供し、

文化政策に関する調査研究を実施し、専門誌を定期的に無料で発行してもいる。

現場の芸術家の動きに導かれるように、創造と普及と教育を支える公的な支援制度の枠組みも整備される。いずれの地域でも、国民建設の動きの中で言語と文化がきわめて重要な核を構成していた以上、公権力は芸術家の動きを主導することはなくとも、積極的に後押しした。[24] ケベックで文化問題省（現在の文化・コミュニケーション・女性条件省）が設立されたのは1961年のことで、フランスで同名の省庁がつくられてわずか2年後のことであり、しかも創設後すぐに演劇・劇場局が内部につくられている。一方、1970年のベルギー連邦化の第一段階において、フランダースがまず要求し、獲得したのは言語と文化に関する権限だった。文化政策は言語別に明確に分けられ、ベルギー全体を視野に入れた文化政策は存在していない（蘭仏の言語共同体が共存するブリュッセル首都地方にさえ、両言語共同体にまたがる文化政策は、ごくわずかな例外を除いて存在しない）。[25] 1975年に施行された劇場法（フランダース共同体にのみ適用される共同体法）によって演劇に対する公的支援の枠組みがつくられ、その後、法の枠に収まらずに多様化し続ける表現に対応するために1993年に舞台芸術法、2004年に芸術法が代わりに施行され、フランス語共同体政府とは全く異なる文化政策が形成された。

こうして両地域において、創造・普及・教育・研究・雇用・公的支援、いずれの側面から見ても、英語圏カナダやフランス語圏ベルギーとは区別される独自の領域が構成されるようになった。両地域の政府の文化予算は今日、相当な規模に達している。一般的に文化に対する公的支出の少ない北米において、ケベックの文化予算の充実ぶりは際立っており、ケベック州文化コミュニケーション女性条件省の文化支出は、5億9,120万ドル（2006年度）、ケベック州芸術人文評議会の予算は7,349万ドル（2006年度、文化省予算に含む）に上る。支出の内容が同一でない以上、単純比較は慎むべきだが、連邦政府カナダ遺産省の支出が14億340万ドル（2006年度）、カナダ芸術評議会の予算支出が1億8,120万ドル（2006年度）であること、さらに人口はケベック州の1.5倍ほどであるオンタリオ州の文化省の支出が3億6,570万ドル（2006年度）、オンタリオ州芸術評議会の予算が4,044万ドル（2006年度）とケベックの半分強にすぎないことを見れば、その手厚さが理解されるだろう。同時に、連邦政府による芸術支援制度も整備され、二公用語の対等性の原則から、フランス語文化に対する支援に相応の割合が振り向けられたこともケベックに幸いした。[26]

ベルギーでは、連邦政府が王立モネ劇場やボザール（美術宮）を維持しているものの、文化政策の権限をほぼ全面的に地方・共同体政府に委譲し、その予算規模は小さい（フランス語共同体政府が2004年に公表した調査によれば、2002年のベルギーの公的文化支出総額の3％を占めるにすぎない）。フランダース政府は2002年に8億7,932万ユーロ（ベルギー全体の28.1%）を文化に対して支出している。これは、フランス語共同体政府の予算5億5,452万ユーロ（同17.7%）およびワロニー地方政府（文化財は地方政府所管）の予算6,909万ユーロ（同2.2%）を合わせた金額と、人口比を考えればほぼ見合った水準だといえるが、市のレベルでは、フランダースの自治体

はワロニーの自治体の文化支出（2億9,117万ユーロ、9.3%）を大きく上回る金額（7億6,379万ユーロ、24.4%）を文化に投じており、全てのレベル（共同体・地方、州、市）の政府の予算を合わせると、フランダース（ベルギー全体の59%）は、フランス語圏（33%）をはるかに上回る水準の支援を文化に対して行っている。[37]

言語による囲い込みと外部への開かれ

舞台芸術環境の整備が進むにつれて、ケベックでは、1930年代にはモントリオールにさえプロの演劇集団は2、3しかなかったが、1980年代にはその数は100を超え、さらにダンス、サーカス、パフォーマンスが後に続き、国際的に評価される芸術家が数多く生まれた。フランダースでも、1975年の演劇法に基づいて公的支援の枠組みができた際、初めて助成を受けた団体は22だったが、翌年にはその数は倍増した。[38]

一言語主義化を推進した政府が文化にも積極的に関与する中、政治が文化を囲い込むことによって一定の弊害を生じさせていたのは事実であろう。言語の重要性が大きい演劇と、音楽、ダンス、サーカスといった他の領域では事情がやや異なるとしても、モントリオールにあるカナダ国立演劇学校は、英語とフランス語の部局で全く異なる運営がなされ、オタワの国立芸術センターの演劇部門も完全に言語別に組織されている。ベルギーの状況はより深刻であり、連邦政府の下におかれた王立モネ劇場（オペラハウス）を除くと、フランダース政府とフランス語共同体政府の両方から助成を受けている劇場や上演団体は、クンステン・フェスティヴァルのような例外的事例を除き、首都ブリュッセルにさえ存在していない（ケベックの場合、主たる劇場や上演団体は連邦政府と州政府の両方の助成を受けている）。

一方、表現の媒体・手段・内容、いずれをとっても多様化が大きく進んだ。1980年代にはセノグラフィ、映像、身体、テクノロジーに関心を寄せる舞台芸術家が増えた。その表現は断片性、多中心性、無根拠性によって特徴づけられ、そこではしばしば演劇、舞踊、サーカス、音楽、映像、美術など複数のメディアが融合・交錯し、領域横断的な様相を見せている。さらに、ときにナショナリストの批判を受けながら、ケベックではロベール・ルパージュやドゥニ・マルローのようにフランス語と英語、フランダースではアラン・プラテル、ヤン・ロワース、ヤン・ファーブル、tgスタンのようにオランダ語、フランス語、英語をともに用いる（または公演地によって使い分ける）芸術家が現れた。こうした多言語性は、過去のダイグロシアの痕跡であるとともに、外部の文化との出会い、市場へのアクセスを容易にした。さらに、ケベックではフェスティヴァルを通じた国際化、フランダースでは欧州レベルの芸術文化組織のネットワーク化と協調によっても、両地域は1980年代にナショナルな枠組みを抜け出てインターナショナルな存在となる。

ケベックでは以前より、1967年のモントリオール万博、1976年のモントリオール五輪のような大規模なイヴェントは、ケベックの人々と外部の世界との出会いを可能にし、ケベックの「狭さ」

を乗り越える必要性を人々に認識させた。モントリオールに国際芸術会議（1984年創設、現在の舞台芸術見本市CINARS）、アメリーク演劇祭と国際ヌーヴェル・ダンス・フェスティヴァル（1985年創設、2007年より両者が一本化されてフェスティヴァル・トランスアメリークとなった）、ケベック市にラ・キャンゼーヌ演劇祭（1984年創設、現在のカルフール国際演劇祭）と、国際フェスティヴァルや見本市が相次いで創設された。人口の多くが仏英語を操ることができることも有利に働いた。

統合の進む欧州では、人の移動の自由化が目指され、国境の持つ意味は相対的に失われつつあった。1980年代のフランダースで公的支援の枠組みから外れて不安定な活動を続けていた芸術家にとって、言語を共有するオランダにあり、より安定した支援を受けていた文化施設はしばしば重要な受け皿だった。[23] また、1981年に欧州の劇場ネットワークIETM（本来は「非公式欧州劇場集合」の略号だが、現在では単に「IETM」ないし「国際舞台芸術ネットワーク」と呼ばれる）が結成され、1989年以降、その事務局はブリュッセルに置かれ、現在はフランダース演劇研究所と同じくカイテアター内にあり（カイテアターの創設者ヒューゴ・ドゥ・フレーフはIETMの創始者でもあった）、フランダースの舞台芸術界は欧州のネットワークと文字通りに直結した。フランダース人の多くがオランダ語、フランス語、英語、ドイツ語を操れることは、舞台芸術が欧州化・国際化する上で状況をさらに有利にした。カイテアター・フェスティヴァル（1977年創設）、現代ダンスのクラップストゥック・フェスティヴァル（1983年創設）は、誕生したばかりのフランダースの舞台芸術を外部に接続する役割を果たし、フリー・レーズンによってブリュッセルに1995年に創設されたクンステン・フェスティヴァル・デ・ザールは、ブリュッセルとベルギーの蘭仏両言語共同体の間の、さらに世界との架け橋となり、プログラムの芸術性と先駆性によっても欧州における文化拠点としてのブリュッセルの地位を高めた。

そのとき、認知の審級、受容の（市）場としてのフランスの役割は無視できない。リモージュのフランコフォニー・フェスティヴァル（1984年創設）は、ケベックのフェスティヴァルとともに、ケベックと外部を結ぶ回路を開き、劇場、演劇人同士の交流が深まる中心となった（1986年以降、このフェスティヴァルはルパージュの作品を精力的に紹介し、ケベック演劇を世界的に知らしめた）。陸続きともいえるフランダースにとってはフランスの重要性はより明白であり、1990年代以降、パリ市立劇場やアヴィニョン演劇祭、あるいはベルギー国境に近いリールと近郊の劇場は、フランダースの芸術家にとって特に重要な活躍の舞台を提供している。

また人口が6、700万人ほどの社会は市場規模が限られるだけでなく、芸術家はその「小ささ」に飽きたらなさを覚えるのだ（ルパージュの作品にしばしばケベックの外部へと旅するケベック人が登場するのは示唆的だし、フランダースの芸術家の多くも極右の排他的な主張を前に断固として欧州的、国際的であろうとしている）。[24] より創造的な出会いを求め、新たな観客の開拓を望むなら、境界を越えてその彼方の他者にも理解されなければならない。両地域の芸術家の多くが、

文学的言語よりも身体や映像を通じてより直接的に観客に訴えかけ、観客に応じて複数の言語を使い分けているのは理由なきことではない。そして、そもそも舞台表現における他者に対する開かれは、社会における他者への開かれ、少なくともそれを希求する思いを反映したものだったのだといえよう。

結びに代えて

両地域における国民意識の高まりは、自治強化、ひいては国民建設を目指す壮大なプロジェクトを起動させ、言語・文化政策はその核として重視され、舞台芸術の開花を支える土壌となった。国民の創出と統一を目指した政治の運動は、一方では徹底した一言語主義のように排他的な性質を拭いきれないが、逆説的に、きわめて多言語・多文化的で領域横断的で、差異、多様性、断片性、不統一性を強調した芸術表現を生み出した。国民国家あるいは近代性の論理は一なるもの (l'un)、統一＝単一性 (unité) を目指してきたことを考えると、[31] プレモダンからポストモダンへと一挙に移行したかのようなその跳躍は、やはり驚くに値するように思われる。

自分はいかなる場所にいるのか、自分はいかなる共同体を構成しているのか、すべきであるのか。ケベックとフランダースの人々は自らのアイデンティティを再定義する必要に迫られ続けたが、その問いは、芸術とは何か、何が芸術であり芸術でないのか、芸術を不断に再定義しようとする芸術家の問いときわめてよく重なり合うものだった。確かに自らのアイデンティティに対する反省的な問いかけは、近代とその芸術の最も基本的なパラダイムであった。ケベックやフランダースにおいて新しい舞台芸術が誕生して根づいたのは、来るべき社会の創造と新たな芸術の創造とが同じ一つのことを指し示していた、そんな幸福な時期だったといえるだろう。

注

本論文は、『シアターアーツ』2005年冬号、pp.42-53に掲載された「演劇とナショナリティ　ケベック演劇と表象上演の政治学」において、ケベック演劇について展開した考察をもとに、フランダースに関する分析、両者の比較とを加えて、大幅に書き改めたものである。また本論文は、早稲田大学演劇博物館グローバルCOEプログラム「演劇・映像の国際的教育研究拠点」芸術文化環境研究コースの研究成果の一部である。

（1） 本論文ではケベック (Québec) によってケベック州 (Province de Québec) を表すが、ケベック州（特にモントリオール）には英語話者、ニュー・ブランズウィック州やオンタリオ州にもフランス語話者が歴史的に存在しており、ケベックとフランス語圏カナダは厳密には一致しない。フランダースの事情はさらに複雑である（ここでは言語対立に鑑みてフランス語のFlandreフランドルは採用せず、しかしオランダ語のVlaanderenフラーンデレンよりも一般的な英語のFlandersフランダースを用いる)。フランダースには、地理的なフランダース地方（Vlaams Gewest、ブリュッセル首都地方を含まない）と言語文化的なフランダース共同体（Vlaamse Gemeenschap、ブリュッセル首都地方に居住するオランダ語話者をも包含する）の二重の意味がある上、フランダース共同体がフランダース地方を吸収合併するかたちでつくられたフランダース政府・議会は、フランダース地方にはないブリュッセルを首都に定めた。そのブリュッセル首都地方ではオランダ語話者は人口の10〜15%にすぎず、近郊にはフランダース地方に位置するがフランス語話者が多数を占める自治体が複数存在し、フランダースのオランダ語一言語主義とフランス語話者のフランス語を用いる権利の間で深刻な衝突が生じている。ケベック人、フランダース人にはフランス語話者、オランダ語話者以外の少数派も含まれることには留意されたい。

（2） 英国統治に対する反乱が相次いだことから仏系カナダ人の英国系への同化を勧告した『ダラム報告』(1839) の表現。日本カナダ学会編『資料が語るカナダ』有斐閣、1997年、pp.41-2 に一部が紹介されている。

（3） représentaionには上演、再現、表象、代理、代表など複数の意味がある。エマニュエル・ヴァロンの指摘に従ってこの論考では演劇と政治とを分離せずに「représentationの二つの顔」として同時に考えることを試みたい（ここでの政治とはポリス＝共同体をめぐる思考として広く解されたい)。Emmanuel Wallon, “Scène politique et scène théâtrale : deux faces de la représentation”, 2004年12月 6 日早稲田大学文学部における講演。

（4） カナダの国民記念日は 7 月 1 日（1867年に英領北米法が施行された日）だが、ケベックでは 6 月24日（ケベックの守護聖人洗礼者ヨハネの日）の方がはるかに大規模に祝われている。一方、ベルギーの国民記念日は 7 月21日（1831年に初代ベルギー国王が憲法の遵守を誓った日）だが、2007年の記念日に式典に向かうルテルム首相（フランダース選出）が記者に国歌（ラ・ブラバンソンヌ）を歌うよう求められ、フランス国歌（ラ・マルセイエーズ）を歌い始めた姿が、ベルギーそして世界中に流れた。

（5） フランス語圏ベルギーには行政的にいうとワロニー地方政府・議会とフランス語共同体政府・議会（ワロニー地方の住民とブリュッセル首都地方のフランス語話者に対する権限を有する）が存在する。「ベルギー・フランス語共同体 (Communauté française de Belgique)」は名称としてわかりにくく、「ワロニー＝ブリュッセル」も用いられるが、これもブリュッセルが法律上の仏蘭二言語都市であることを隠蔽しがちである。

（6） ケベック州はカナダ連邦1982年憲法に唯一まだ署名していない。カナダ連邦政府・議会の公用語は英仏語だが、ニュー・ブランズウィック州（公用語は英仏語）を除いてケベック以外の州は事実上の英語一言語主義を採用している（ユーコン準州では英仏語、北西準州・ヌナヴト準州では英仏語および先住民諸語が公用語)。

（7） カナダ連邦政府統計局 http://www.statcan.gc.ca/daily-quotidien/090623/t090623a2-eng.htmによる。

（8） 英語で運営される教育・医療・福祉施設のネットワークが歴史的に存在し、英語のみでも充分に生活できる。またフランス語運用能力を持つ英語話者の割合が大きく上昇し、言語共同体間の緊張は大きく減じた。

（9） ベルギー連邦政府統計局のデータによる。ワロニー地方の人口は346万人、ブリュッセル首都地方の人口は105万人である。言語別の話者人口に関する正確な統計は存在しないが、比例代表選挙の際の政党（言語別）に対する有権者の投票行動からブリュッセル首都地方の人口の10〜15% がオランダ語話者、85〜90% がフランス

語話者と見られている。http://www.statbel.fgov.be/FiGUres/d21_fr.asp#2

(10) ベルギー連邦王国は連邦政府・議会のほか、地理的な地方（フランダース、ワロニー、ブリュッセル首都）と言語的な共同体（オランダ語、フランス語、ドイツ語）から構成され、それぞれが固有の権限と政府・議会を持ち、かつ対等である。フランダースでは共同体と地方が合併して単一の政府・議会を構成するが、フランス語話者といってもワロニー人とブリュッセル人は単一共同体を構成している意識が弱く、様相はより複雑である。

(11) ケベックではフランス語話者は多数だが、カナダ人口の4分の1弱（しかも低下し続けている）、北米人口の約2％にすぎない。オランダ語話者はフランダースとベルギーでは多数だが、首都ブリュッセルでは減少を続ける少数派で、欧州連合内部（27加盟国、人口約5億人）ではオランダを加えてもオランダ語話者人口は2,200万人ほどである。

(12) 静かな革命以前のケベックではフランス系の血統、カトリック信仰、フランス語使用が成員の条件であり、また純血性に固執するあまり、移民の受け入れに不熱心だった。だが、移民国家の中で発言権とそれに見合う人口水準を維持するためにも、（連邦のマルチカルチュラリズムではなく）インターカルチュラリズム政策を掲げ、積極的な移民受け入れと多様性の尊重に基づく統合に転じ、ケベック人の定義は大きく拡大した。一方、フランス語圏と違って移民受け入れの歴史が浅いフランダースでは、反フランス語、反連邦政府、反移民の姿勢をとる極右政党が伸長し、それに影響されて政界全体が右傾化したが、増え続ける移民人口の（特にブリュッセルでの）オランダ語を通じた統合は重要課題として認識されている。

(13) ケベック州は1867年の連邦結成以来、連邦内で唯一、英仏二言語主義を義務づけられてきたが、1969年以降、一連の言語法の制定を通じてフランス語一言語主義政策を実現してきた。特に1976年に独立主義のケベック党が政権について制定したフランス語憲章（101号法）は、一定規模以上の民間企業にフランス語での経営を義務づけ、フランス語以外の外国語のみによる商業広告や屋号の掲示を禁止し、移民の子弟にフランス語系の学校に就学することを求め、強い反発を受けながら実施された。一見極端に見えるこの介入主義的政策のおかげで、フランス語話者と英語話者の間の経済格差は縮小し、脆い均衡がもたらされた。

(14) ケベック州は本来の「州 (province)」の代わりに「国 (Etat)」を自称し（アメリカ合衆国の州もEtatであるが、ここでの含意は「国家」としてのものである）、ケベック市を首都 (capitale nationale) に指定し、7月1日のカナダ・デー (Fête du Canada) の1週間前の6月24日をナショナル・デー (Fête nationale) としている。これまでケベックが「独自の社会société distincte」を構成するとは、1982年憲法の改正の議論の中でいわれたものの（しかも結局合意に至らなかった）、その「国民」性が外部から認知されることはこれまでまずなかったが、ハーパー連邦首相は2006年、「ケベック人が統一されたカナダの内部で国民を構成する」ことを、カナダの統一性が保たれる条件の下とはいえ、公式に認めて話題となった。

(15) ヤン・エルクは両地域のナショナリズムに強い類似を認めると同時に、ケベックではカトリック教会が議会に政治的代表を持たず、「静かな革命」に際して英語系資本とカトリック教会が社会の近代化に対する障害と見なされ、世俗的かつ社会民主主義的なナショナリズムが力を持ったのに対し、フランダースでは右派のカトリック民主主義政党が早くから存在してフランダース運動と結びつき、フランダースのナショナリズムがカトリック的かつ保守的性格を持ったことを指摘している。Jan Erk, "Le Québec entre la Flandre et la Wallonie : une comparaison des nationalismes sous-étatiques belges et du nationalisme québécois", *Recherches sociographiques,* vol.XLIII, No.3, septembre-décembre 2002, pp.499-516. この性質の違いが、分離独立を強く支持したケベックの演劇人とナショナリズムから距離をおいたフランダースの舞台芸術家の態度の違いに影響したのだといえるだろう。

(16) 国の将来を担うエリート層の教育のみならず、中世（創設1425年）より蓄積された図書館の蔵書までもが番号の偶奇によって二分されるという、笑うに笑えない結果を伴った。

(17) フランダース地方のGDPは1955年にはベルギー全体の4割だったが、今日では6割に達する。長いことベルギーの牽引力だったワロニー地方は戦後以来の不況にあえぎ、今日では2割強を占めるのみで、ブリュッセ

ル首都地方が残りの2割弱を占める。

(18) ケベック州政府はフランス政府との間に「文化協調協約」(1965年) ほか数多くの協約を締結し、カナダ連邦政府、ニュー・ブランズウィック州政府と並んで国際フランコフォニー機関に加盟している。オランダ政府とフランダース政府は1980年に言語・教育・文化の面での共通政策の実現を目的としてオランダ語連合を結成した。

(19) ケベックでは『ル・ドゥヴォワール』、フランダースでは『ドゥ・スタンダルト』など、自治強化・独立を支持した日刊紙の役割は大きかった。今日では出版メディア、公共テレビ・ラジオ放送も言語別に編成され、その結果、言語によって得られる情報が異なり、国民共同体として想像される領域の形成に大きな影響を与えている。特にベルギーではメディアが言語対立を誇張してさらに煽っているとの批判が根強い。

(20) カナダのフランス語話者、ベルギーのオランダ語話者の代表＝表象も大きな変化を被っている。1969年の公用語法は、カナダ連邦のレベルにおいて英仏語を完全に対等な言語として認めたが、これはフランス語の地位向上に大きく貢献した（皮肉にも同じ年にケベック州はフランス語一言語主義に移行し始めた)。ベルギーでは1930年代には蘭仏語は対等な公用語と認められ、フランダースの法律上のオランダ語一言語主義が確立した。今日では両国の連邦政府やナショナルと呼びうる大企業の中で高い地位を占めるには、英仏語または蘭仏語の両方を話し、国の二言語性を代弁＝表象できることが求められるが、これは二言語話者の比率が高いカナダのフランス語話者、ベルギーのオランダ語話者に有利な変化だった。

(21) 1960年代のケベックが英語圏カナダに対抗する上で、フランスやフランス演劇の影響、名声のあるフランス文化の導入の政治的意思は大きかったと思われる。脱植民地化が進み、自らの存在感の弱体化を実感していたフランスと、英語圏の支配からの脱却を求めたケベックとの利害が一致したのだといえよう。実際、1950－70年代に創設されたコンセルヴァトワール、文化問題省、文化の家などは名称もフランスと同じであるようにフランスに着想を得ていたし、上演戯曲はフランスで成功したものが多く、演劇学校の教師も当初はフランスから多く招かれ、台詞回しもフランス流が当然だった。

(22) Gildas Illien, *La Place des Arts et la Révolution tranquille, les fonctions politiques d'un centre culturel,* Presses de l'université Laval, 1999.

(23) コンセルヴァトワールの大規模増改築計画の一環として、当初からアントワープ市が主導したドゥ・シングルは例外だが、この場合も市は劇場の機能をもっぱら学生の発表会場と貸し館として捉えており、ドゥ・シングルが創造拠点となったのは内部にいたフリー・レーズン（クンステン・フェスティヴァル創設者）らの才能と偶然によるところが大きい。

(24) フランダース政府は1993年以降の一時期、芸術家の顰蹙ないし反発を買いながら、フランダース政府から助成を受けて世界的に活躍していた芸術家に「フランダース文化大使」の称号を（選択の余地なく）与え、芸術を政治的に利用する意図を隠さなかった。

(25) 両政府の動きがあまりに鈍いために（フランダース政府とフランス語共同体政府はそれぞれ外国政府とは文化協調協定を交わしているが、両政府間に協定は存在しない)、フランス語系とオランダ語系の2つの文化施設ネットワーク間の協調が先行している。

(26) カナダ芸術評議会の2006年度助成実績で見ると、ケベック州からの助成申請件数は全体の34.1%、助成金額は31.6%を占め、カナダの人口割合を大きく上回ってオンタリオ州の水準（申請件数の29.5%、助成金額の33.7%）に匹敵している。Conseil des arts du Canada, *Financement aux artistes et organismes artistiques 2006-7, aperçu à l'échelle nationale,* 2008.

(27) 文化に関する権限は、文化財に関しては地方政府、その他は全て共同体政府にあり（オランダ語圏ではフランダース政府が一元的に行使している)、ブリュッセル首都地方の文化予算は全てのレベルを合わせても、ベルギー全体の4%を占めるにすぎない。連邦政府所管の文化施設のブリュッセル集中を考慮して連邦政府の予算（3%）を加えても低い水準にとどまり、現実に即さないように思われるが、フランダース政府・フランス語共同体政府からブリュッセルの文化施設が受ける支援はそこに含まれていないからである。*Faits et Gestes,*

débats et recherches en Communauté française Wallonie-Bruxelles, "Regards sur les dépenses culturelles en Belgique et en Communauté française", avril-mai-juin 2004.

(28) Vlaamse Theater Instituut, *Metamorphoses : Performing Arts in Flanders since 1993.*

(29) フランダースでは1986年以降、舞踊上演団体、アーツ・センターに対する公的支援が、1993年の舞台芸術法とともに複数年度助成が制度化され、舞台芸術界の安定に大きく寄与した。2009年まで10年ほど文化大臣を務めたベルト・アンシオーの下でフランダース政府の文化予算は大きく伸びた。近年ではオランダとの違い（オランダ人には理解されにくい言語的特徴や、芸術性を重んじるフランダースと社会性を重んじるオランダとの文化観のずれ）も強く意識され、オランダの重要性はかつてに比べると減じている。

(30) アラン・プラテルは作品に大人と子ども、男性と女性、健常者と障害者、異性愛者と同性愛者、プロフェッショナルとアマチュアを登場させ、創造の主体自体が「多様性の中の統一性」（欧州連合のモットー）を体現している。ヤン・ファーブルは、自作品でオランダ語を用いない理由の一つを、そもそもフランダース人がカンパニーに少ない上に、極右政党に発言権を与えてしまったフランダース政府に抗議の意思を示すためだと述べている（筆者によるインタヴュー、2009年２月21日、アントワープ）。

(31) 単一的近代国民国家のモデルを提供した「一にして不可分の共和国 (République une et indivisible)」（フランス憲法第１条）という表現、あるいはそれに先駆けて17世紀に劇作術の古典主義的規範を定めた「三単一の規則 (Règles des trois unités)」を考えてもよい。